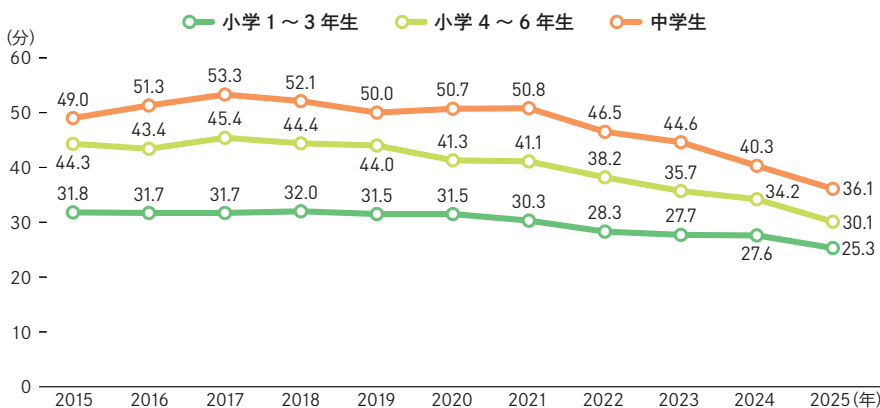


# 子どもの学習時間の変化と、 成績層による違い

義務教育のうち規則正しい生活リズムを確立する上で、一定の学習時間を確保することが望ましいとされる。では、その実態はどうなっているのか。今回は11年間にわたる子どもの学習時間の変化と成績層による違いを、データからひも解いていく。

## 1 11年間で学校の宿題と家庭学習の時間は減少、学習塾の時間は横ばい

図1 学校の宿題の時間(学校段階別)



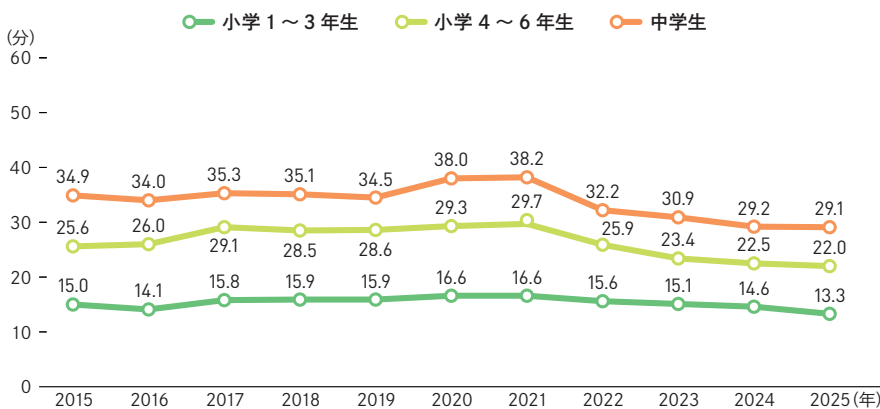
### 家庭での学習習慣が

### 身につけていない子どもが増加か

2015～2025年の11年間にわたる縦断データから、小・中学生が1日に費やす「学校の宿題の時間」「家庭学習の時間(宿題を除く、以下省略)」「学習塾の時間(非通塾者を含む、以下省略)」の推移を見ていく。

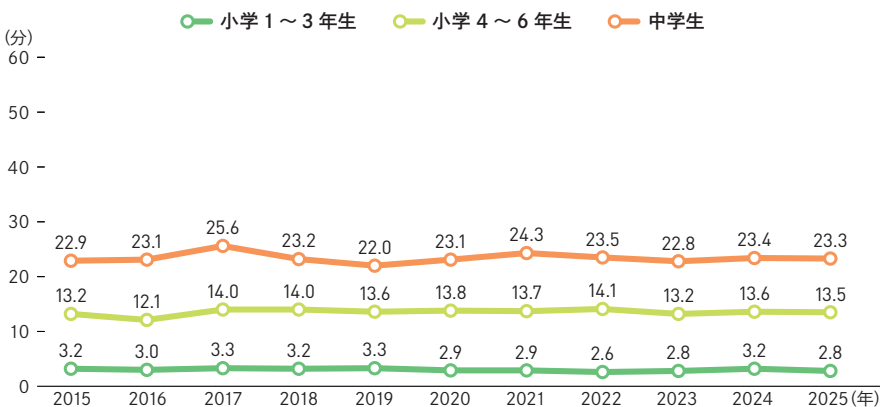
調査年を問わず3つに共通して言えるのは、学年が上がるほど費やす時間が長くなる点だ。一方、項目別に見ると、「学校の宿題の時間」(図1)は全学年で減少しており、減少幅が大きい。2015年と2025年を比較すると、小学1～3年生では6.5分、小学4～6年生では14.2分減少している。中学生では最も長い2017年と比較すると2025年は17.2分減少している。

図2 家庭学習の時間(宿題を除く)(学校段階別)



次に「家庭学習の時間」(図2)は、「学校の宿題の時間」(図1)と比べて減少幅は小さいものの、同様に減少傾向にある。2020～2021年に一部の学年で学習に費やす時間は増えたが、一過性であったことから、コロナ禍による在宅時間増の影響と考えられる。

図3 学習塾の時間(非通塾者を含む)(学校段階別)



「学習塾の時間」(図3)は、非通塾者を含む平均時間だが、どの学年も11年間であまり変化は見られない。

まとめると、「学校の宿題の時間」と「家庭学習の時間」は減少し、「学習塾の時間」は横ばいだった。「学校の宿題の時間」の減少は、地域や学校の方針によって宿題を減らしたり、事実上なくしたりする動きとも関連していることが考えられる。しかし、「家庭学習の時間」まで減少していることから、家庭での学習が習慣化していない子どもが増えている可能性がある。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2025」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学1年生～高校3年生までの親子約2万組を対象に2015年から毎年実施。子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。本報告は2025年までの調査結果による。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

<https://benesse.jp/berd/special/childedu/data/#oyako>



データ解説

ベネッセ教育総合研究所  
研究員

小川 淳子 おがわ・じゅんこ



アジア諸国の研究者を組織し、幼児期におけるレジリエンスの育成に着目した国際共同研究を推進。2025年より本調査に携わる。子どもの非認知能力の成長発達に影響する支援のあり方に関心を持っている。

## 2 成績下位層の減少幅が大きく、上位層との差が拡大

図4 小学1～3年生：1日あたりの合計学習時間（成績層別）  
※学校の宿題+家庭学習（宿題を除く）+学習塾（非通塾者を含む）

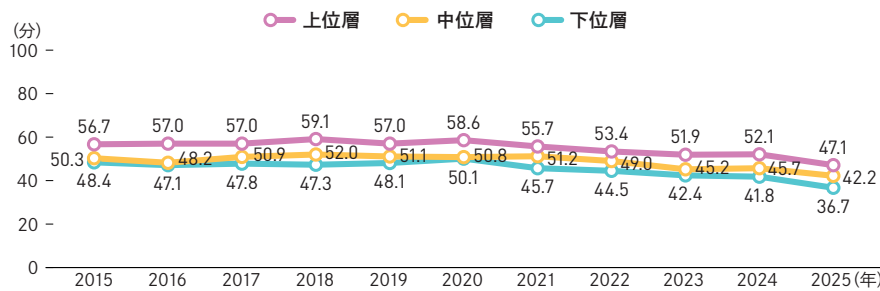


図5 小学4～6年生：1日あたりの合計学習時間（成績層別）  
※学校の宿題+家庭学習（宿題を除く）+学習塾（非通塾者を含む）

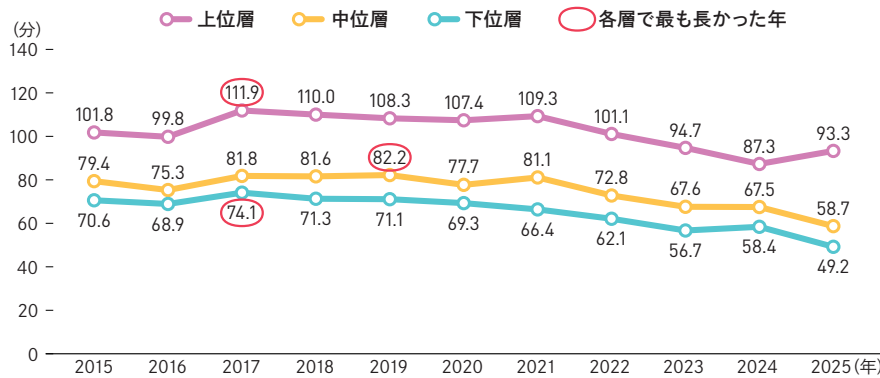
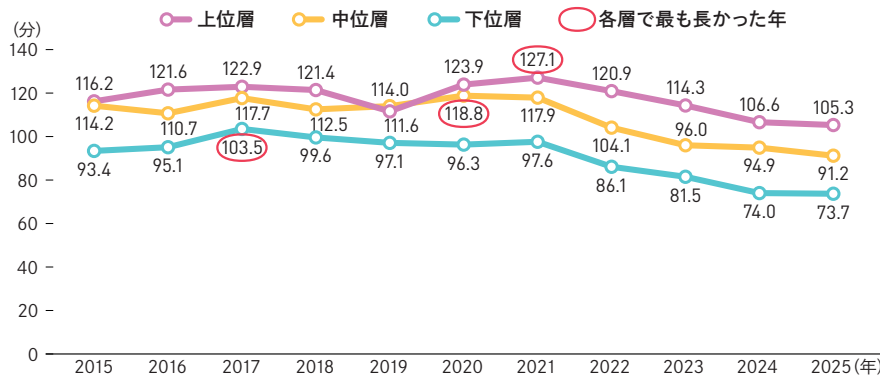


図6 中学生：1日あたりの合計学習時間（成績層別）  
※学校の宿題+家庭学習（宿題を除く）+学習塾（非通塾者を含む）



個々の子どもの状況に応じた働きかけを

それでは、どのような子どもの学習時間が減少しているのか、学年ごとに見ていく。「学校の宿題の時間」「家庭学習の時間」「学習塾の時間」を合算した1日あたりの合計学習時間を成績層別に分析すると、全体として学習時間は減少し、成績層による差が拡大する傾向が見られる。2015年と2025年を比較すると、小学1～3年生（図4）は上位層で9.6分、中位層で8.1分、下位層で11.7分、いずれも減少し、上位層と下位層の差は2015年の約8分から2025年は約10分に広がっている。

特に小学4～6年生（図5）は他学年よりも減少幅が大きく、各成績層で最も長かった年と2025年を比較すると、上位層で18.6分、中位層で23.5分、下位層で24.9分減少。上位層と下位層の差は2015年の約31分から2025年は約44分に大きく広がっている。

中学生（図6）は、2015年と2025年を比較すると、上位層で10.9分、中位層で23分、下位層で19.7分減少し、上位層と下位層の差は、この11年間で約23分から約32分へと拡大している。

以上の結果から、特に下位層で学習時間の減少幅が大きくなっていると言える。家庭環境の影響で差が生まれやすい家庭学習や学習塾とは異なり、学校教育ではどの子どもにも偏りなくかわられるため、個々の子どもの状況に応じた働きかけが可能だ。具体的には、下位層の子どもに学習内容が定着していない可能性があることを踏まえて、授業などではより丁寧な指導や声かけを行うといった支援が求められるのではないだろうか。

注）図4～6：成績層の区分は、保護者による評価（小学1～3年生：2教科）及び子どもによる自己評価（小学4～6年生：4教科、中学生：5教科）について、各教科5段階で回答したものを合算して総合得点を算出し、小学1～3年生、小学4～6年生、中学生ごとに、「上位層」「中位層」「下位層」の人数が均等になるように分類した。